春陽會ニュース

新年を迎える

中川一政

新年御目出度うと云う言葉はまかく自分の口から出て来なかった。

じかしこうやって日本が苦しい緊張から立ち起ってきた今日になって、御目出度うと云っても怒る人はいないであろう。遠くにいる諸君。また近くにいる諸君。此新年を迎えて戦争風沙沈している諸君にその一人一人の顔を思い浮べて御目出度うと云いたい。

春陽会の教場は研究所と書きかえて新しい用意をした。教場を創立してから、五年目の新年であるか、六年目の新年であるか、皆お忘れているだろうから私は忘れた。しかし戦争がよのなく苛酷になったときに発会式をした野の顔、松亭で行ったことは忘れない。

教場は戦争にうばわれて結成された。

ある風家は私に「自分達は戦争家をかく為に戦地へゆく。お前達の身かわりにゆく」と、戦地にゆかない私たちの前で豪語？とした。

頭みもせぬに身がわりになってゆくとは御苦労なことだ。つまらぬところへ卵の犠牲をたてたものだ。

春陽会の風家に戦争感をかいた人でいなかった。各国これはいくらいのたい思のさに見えた。

教場が研究所となったのは、日本の敗戦の夫用でとかなることもあれまた

からである。自分達の手で、それを模索せんばならぬと考えたからである。

純粋美術は役にたたぬものである。また役にたてようと思ったら純粋ではなくなるものである。

再び平和の時代が来て自分達の仕事は明るい花の表に出た。自分達の純粋美術はすでに地獄する心配もなく、後進者も多子済々である。そうしてみれば教場という名も家は力んでいて古きに似たり。

春陽会研究所として新しい年を迎えることも目出度いと思う。

教場から研究所へ

中谷泰

教場が研究所となってから、[illegible]

[illegible]